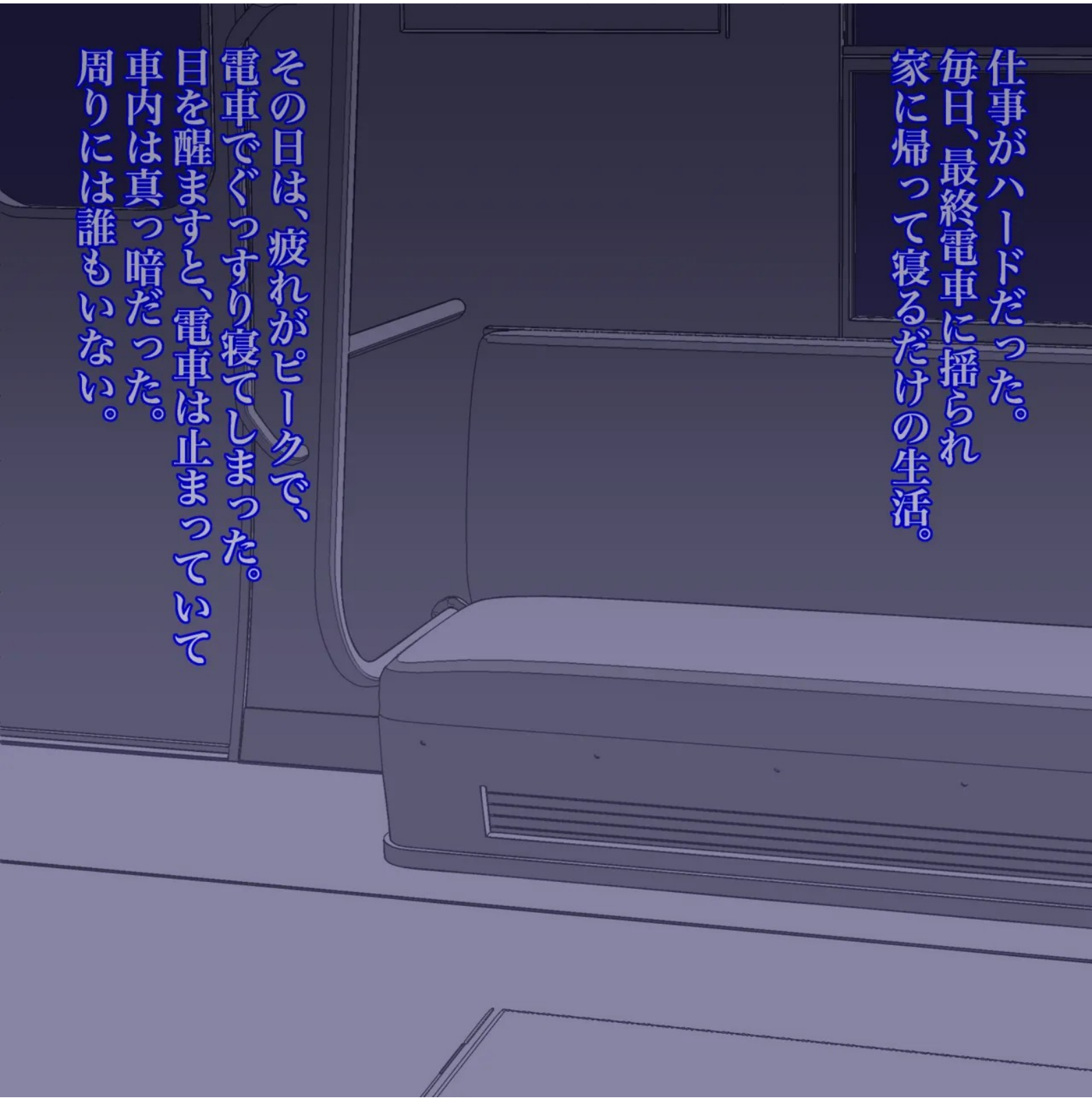
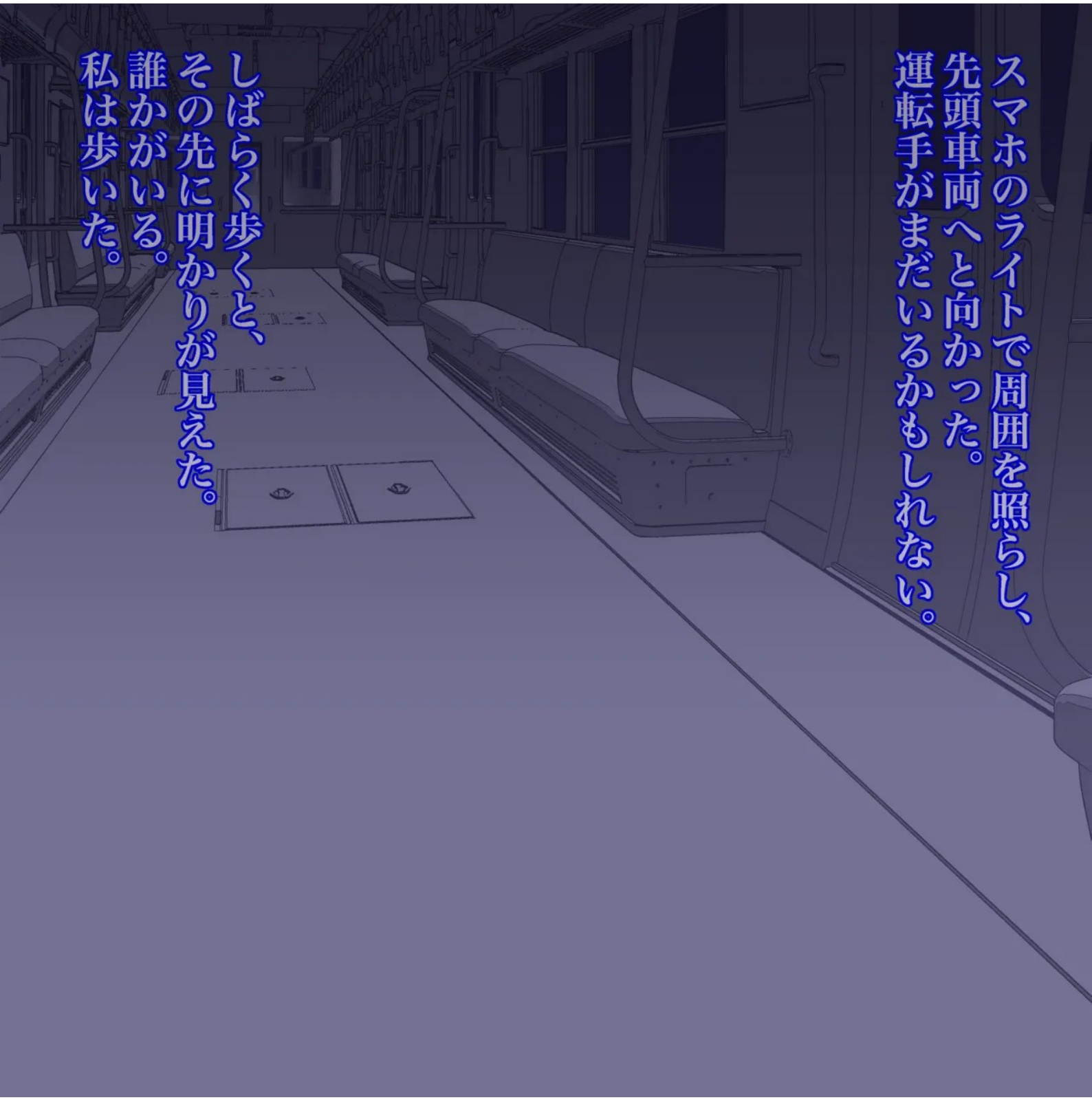
男の娘最終輪姦電車
STUDIO
BASS LINE
EXPLICIT CONTENT


仕事がハードだった。
毎日、最終電車に揺られ
家に帰って寝るだけの生活。
その日は、疲れがピークで、
電車でぐっすり寝てしまった。
目を醒ますと、電車は止まっていて
車内は真っ暗だった。
周りには誰もいない。


スマホのライトで周囲を照らし、
先頭車両へと向かった。
運転手がまだいるかもしれない。
しばらく歩くと、
その先に明かりが見えた。
誰かがいる。
私は歩いた。

重い扉を開けると、
異様な光景が目に入ってきた。
暗がりに男が二人、
女子高生を囲んでいた。

咄嗟に目を逸らしたが
遅かった。
ムッチャこっち見てる。
完全に気づかれている。

男が睨みながら、
こちらに歩いてくる。
おい

お前ここで何してんだ
見たよな？
いや……あの……
いや……何も見てません……

おい、
こっち来い
胸ぐらを掴まれ、
無理矢理、
引き摺られる。
ぐいっ

そして、その子の前に
無理矢理、
連れてこられた。
男たちが私の処遇について
話を始める。
嫌な雲行きだ。
ヤツに
聞くか？
おい、どうする？
誰かいるなんて、
思わないよなぁ
そうだな

男はスマホを取り出し、
話をし始めた。
通話を終え、男は言った。
ソイツにも
やらせろ
ってさ

男が私の胸ぐらを掴む。
私は、すごい力で
羽交い締めにされ
自由を奪われた。
ドっ

これ、預かるから
逃げるなよ
動けないところを
スマホを奪われた。
まずい。
逃げられない。
男に頭を小突かれ、
女の子がひざまずく。

女の子は
私のズボンに
手をかけた
カチャ カチャ

私のものを取り出すと、
手で刺激を与えはじめた。

柔らかく、暖かい手の感触。
萎えていた私のものも
徐々に大きくなってくる。
ふ…
くちゅ
にぎにぎ

大きくなったのを確かめると、
手を止め、ゆっくり舐め始めた。
いやらしい音が車内に響く。

丁寧に、舌を這わせ、
焦らすように、ゆっくり
舐めていく。
ハァ
ハァ
しちゅ
ぐちゅ
ぴちゅ
ぐちゅ

舌で丹念に
敏感なところを舐めると、
ゆっくり口にふくんだ。
口内に貯まった唾液が暖かい。
しゃっ
くちゅ
ぐちゅ…
ーーー

先っぽが、
暖かく湿った口内に
包み込まれる。
いやらしい音が
車内に響き渡る。
ちゅぷ
ちゅぷ
じゅっ
じゅっ

電子シャッター音が
車内に響く。
男が、スマホで写真を
撮っているのだ。
カシャッ
カシャッ
ぐっちゅ
ぐっちゅ
くちゃ。

動画も撮られている。
これで逃げることは
できないだろう。
00:01:09

いやらしい音が響く。
唾液が口のはしから
溢れ出す。
ちゃっぽ
ちゃっぽ。
じゅっ
じゅっ

深く、深く
くわえこむ。
喉の奥に
当たるような感触。
どぐぐぐぐ
グプッ
グェ…
くちゃ
オエッ
ゲプッ

じっぽぐっぽ
目の端に涙をためながらも、
深く浅くを、気持ちが良い速さで繰り返す。
じゃるるるるるる
オエッ
ぐちゃぐちゃ

ビュルルルドピュッ!!
ビクッ
ぐちゅっ
ごぽっ
ごぽ

ゴクン

口の端から
溢れた精液を
丁寧に集め
指でぬぐいとると
全て、コクリと
飲み込んだ。
ハァハァ
ハァハァ
ビクビク
ビクビク
ん…っ
くちゅ
トロ…

終わったか？
じゃあ、
そこで見てろ
ハァハァ
男は、そう言うと、
スマホをしまった。
奴は、ずっと動画を撮っていた。
私は拘束を解かれ、
脇へどかされた。

スマホを奪われ、
写真を撮られた私は、
逃げるわけにもいかず、
彼女が
男たちに犯される様を
見続けた。
ぴちゃ
くちゅ

バン
バン
バン
バン

後ろから蹂躙され
パン
パン
パン
パン
ドピュッ
ビュルルルル…
ぐは
くち

欲望を吐き出し、
中出しし、
ゲポッ
ゲポ
カチャッ
カチャ
ドプッ…
ゲプ…

それが終わると、
次の男が、それに続いた。
ばん!!
ばん…ばん!!
ばし!!

より乱暴に
腰を叩きつけ
精液を体内に
吐き出した。
ぱん
ぱんぱん
どぴゅっ!!
べゃる?

男たちは、
言葉もなく、
黙々と行為し、
それを終えた。

私はその様子をじっと見ていた。
行為を終えた男が
近づいてくる。
ハァハァ

男は、
私に向かって、
強い口調で言った。
お前もやれ
いや……
でも……

まぁ、
勃つんなら
……だがな
気づいてないのか？
あいつ、男なんだ
えっ……
男？

あいつの男に
頼まれて、
こうやって
犯してるんだ。
あいつら
変態なんだよ
ヤツは、
隣の車両にいて
犯されてるのを見て
喜んでやがるんだ。
えっ……
あの子が男ってのも
信じられないのに
なにそれ……

信じられなかった。
やはり、どう見ても、
男には見えない。

その子は、
上目遣いで私を見ていた。
青臭い匂いが、
辺りに充満している。
先ほどの男達との
痴態が脳裏に蘇る。

聞きました？
僕と『彼』のこと
すいません。なんか
巻き込んじゃって
本当だよ。
犯罪に巻き込まれた
と思ったら、
ただの変態プレイかよ。

そう思うと、
なんだか腹が立ってきた。
チラ
僕じゃあ……
やっぱり魅力
ないですよね
どう見ても、男には見えない。
そして、今、
私は誘惑されていた。

頭の中で、何かが
切れる音がした。
相手の体に覆いかぶさり
口をふさぎ、手を押さえた。
ぐっ…
ぎゅー
ガタッ
ゲッ

手を押さえたまま、
強引にキスをし、
首筋を舐める。
グッグッグ
チュッ♡
あ♡

甘い吐息が漏れる
目を閉じる。
形ばかりの抵抗が
弱まっていく。
いや♡
チュッ♡
チュプッ♡
あ♡
はぁはぁ

ねぇ……
あっ♡
甘い体臭と
青臭い饐えた匂い。
熱い吐息が頬を撫でる。

いれて……
ハァハァ
写真を撮られたことや
男たちに監視されていることが
頭をよぎった。
でも、もう自分の頭では
考えられなくなっていた。

私は、すでにいきり立っていた
肉棒を、その、卑猥に口を開けた
穴にねじり込んでいった。
それは、すんなりと、
受け入れられていった。
フー
んぁ
うぁ
ハッハッ
ビクッ
んぐ
ピクッ
んぐぐっ
おぶっ
ぐぢゃ
ｱﾌﾟｱﾌﾟ…

すでに乱暴にほぐされた穴は
私を、すぐ迎え入れ、馴染んだ。
私は、欲望のままに、
腰を動かした。
あっ
あん
いいっ
ビクッ
ビクッ
ずぷっ
ずぷっ
ずぷっ
ずぷっ
きゅん
きゅん
きゅん

私は、欲望を叩きつけた。
喘ぎ声が次第に大きくなり、
壁に頭を派手にぶつけた。
ゴンゴンゴン
あっ
あっ
あん
ビクッ
ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱん
ビクッ
ぎゅん
ぐちゅ
ぐちゅ
ぎゅん

あっ♡
あん♡
あ♡
ハッ
ビクッ
ぱん♡
ぱんぱん♡
ぱん♡
ぱん♡

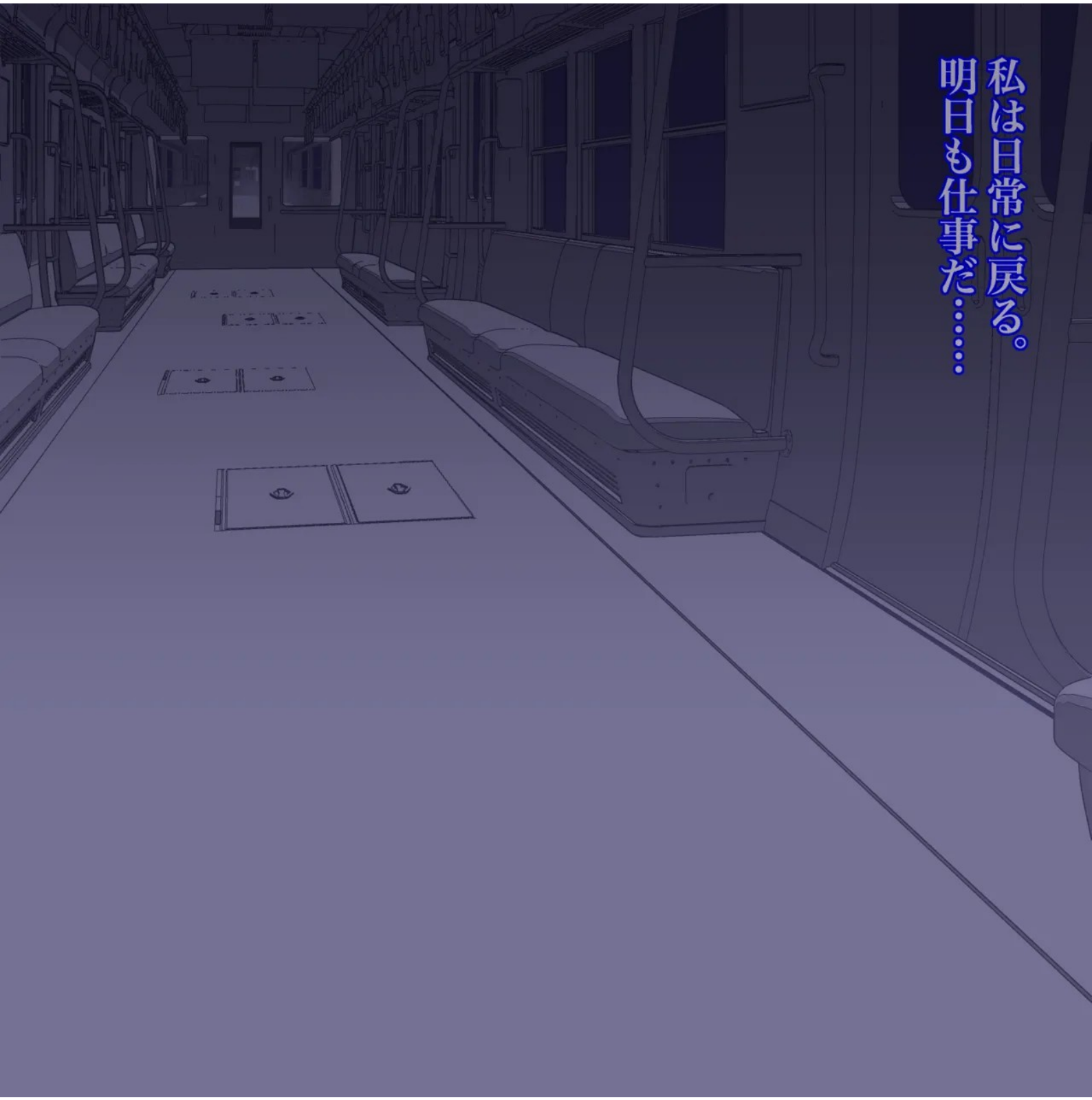
ビクビクビクビクッ
ビクビクッ
ビクッ
ぎゅ
ビクッ

あっ♡
ハッ
ハッ
ハッ
びくっ
びくっ
ぎゅっ

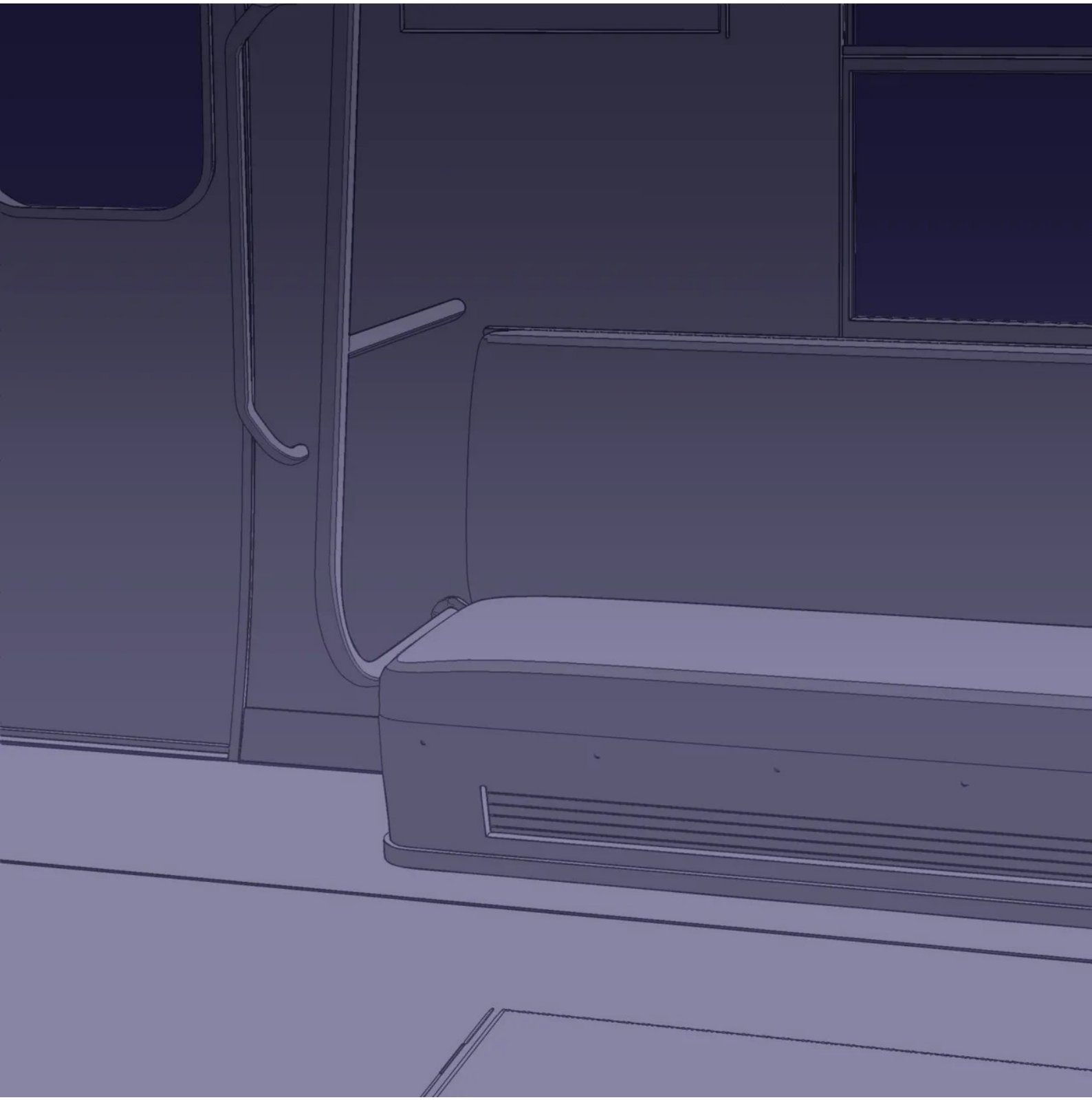
行為が終わった後、
飛び散った精液を
拭き取りながら、
荒い息と共に、
ここから出ていく方法を
教えてくれた。
後ろの車両から、
外に出れるから
ハァ
ハァハァ
ごしごし

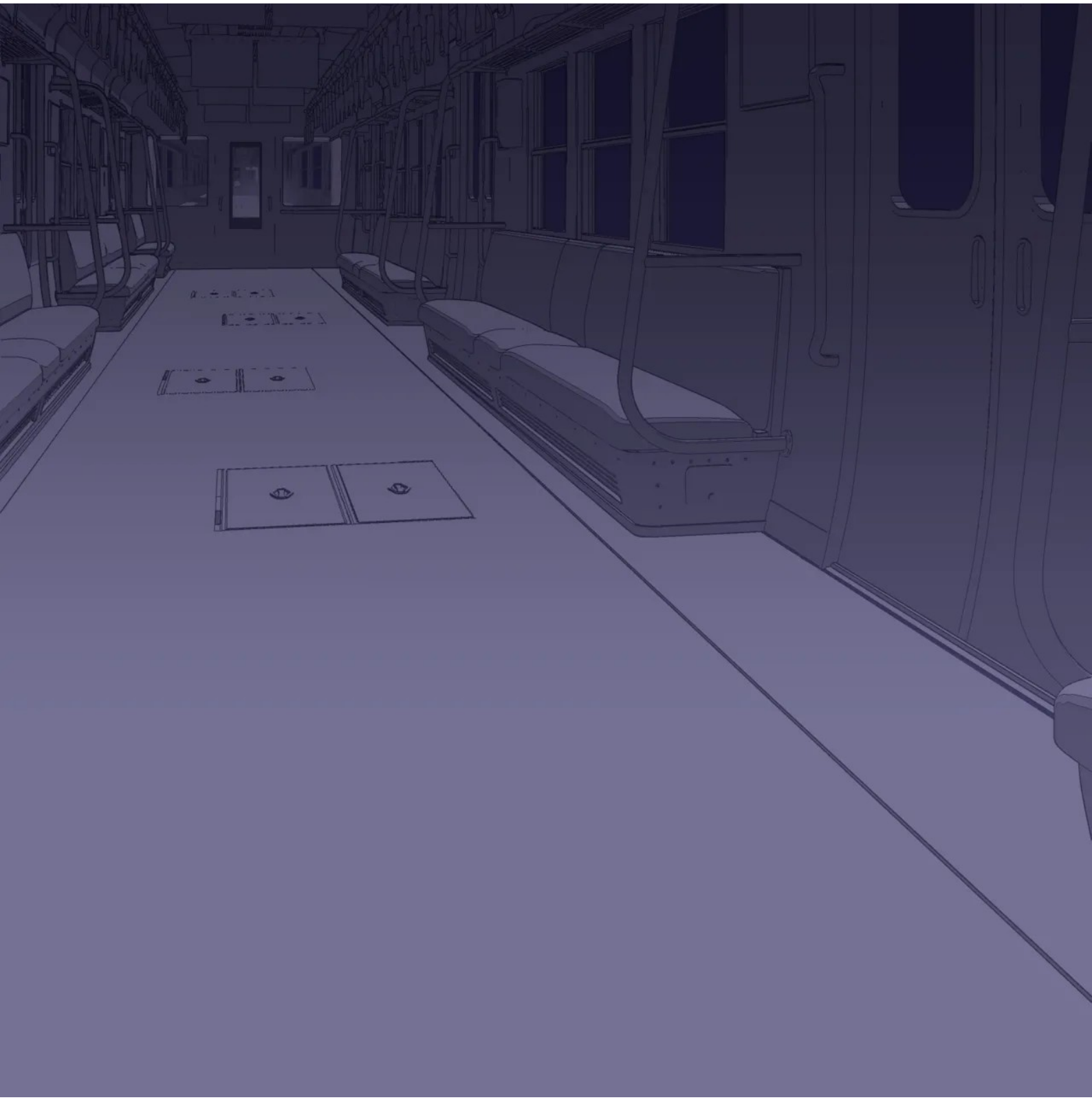
男から、自分のスマホを返してもらった。
写真のデータは渡してくれなかった。
私が、この秘密を守らなければ、
ばら撒かれることになるのだろう。

彼らは
秘密を守るだろう。
今日のことは、
誰にも言えない。
そして、
一夜の夢のように、
思い出すだろう。


私は日常に戻る。
明日も仕事だ……

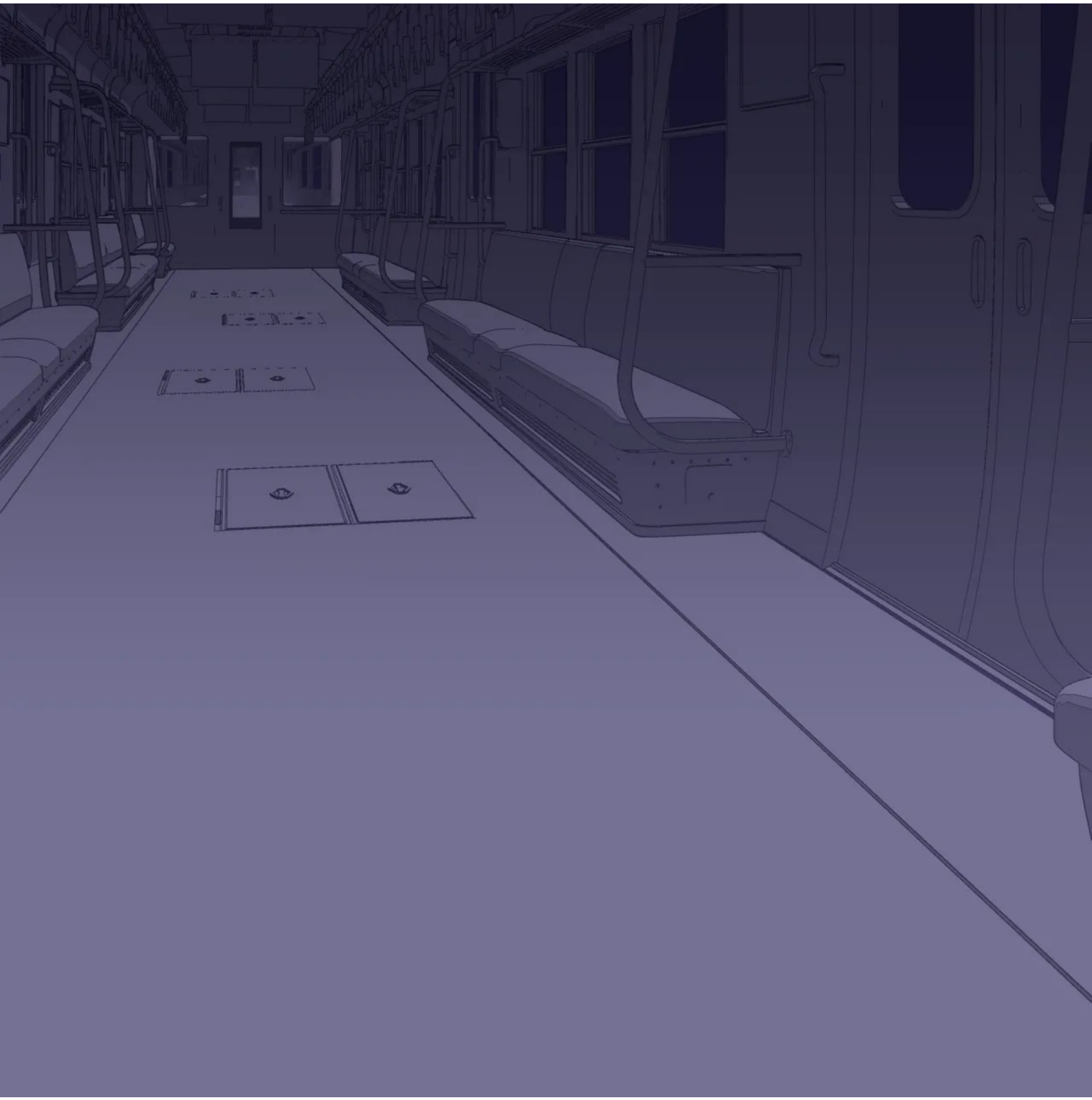
男の娘最終輪姦電車
STUDIO
BASS LINE
EXPLICIT CONTENT



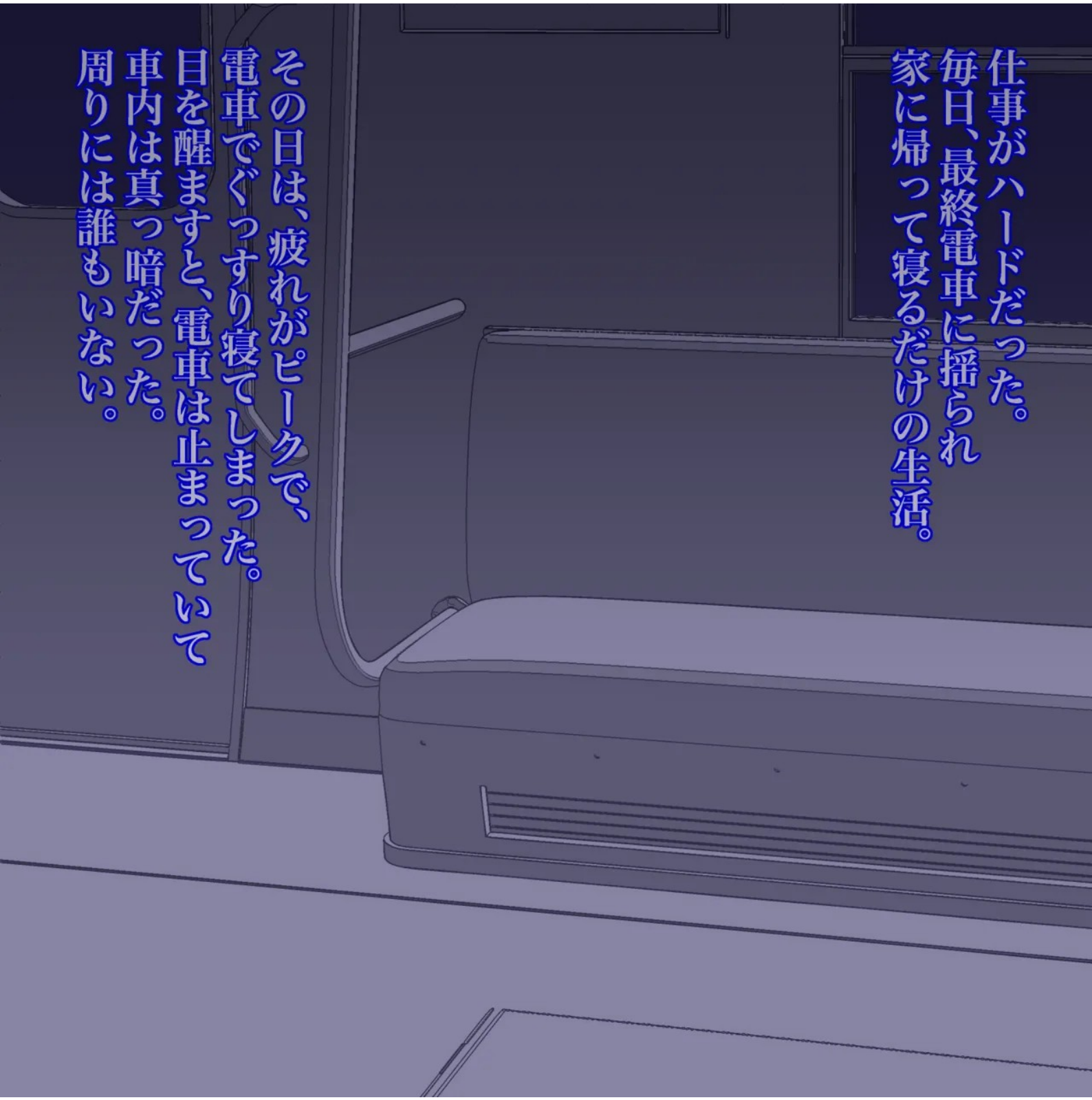


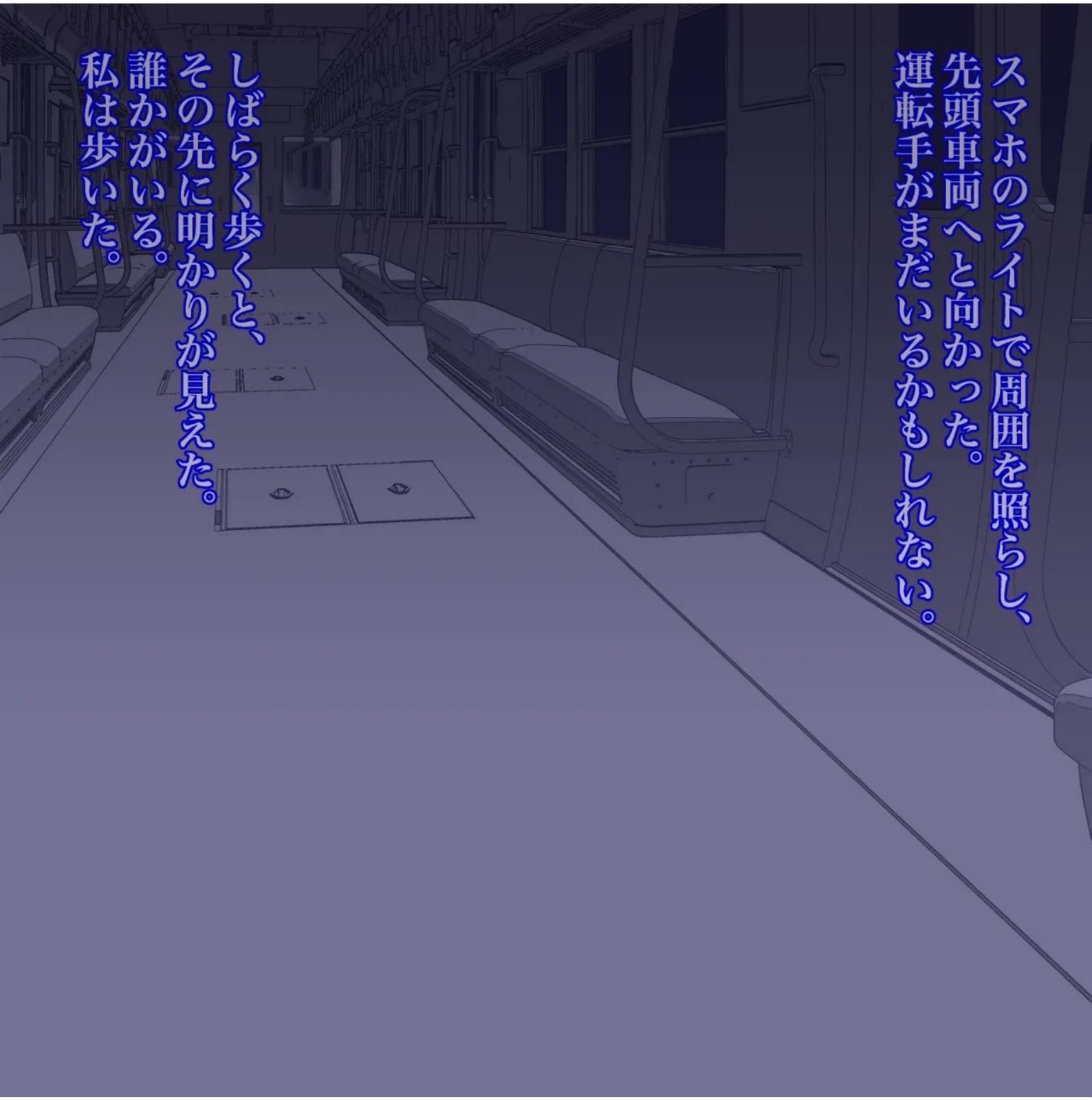
00:01:09

998



男の娘最終輪姦電車
STUDIO
BASS LINE
EXPLICIT CONTENT


仕事がハードだった。
毎日、最終電車に揺られ
家に帰って寝るだけの生活。
その日は、疲れがピークで、
電車でぐっすり寝てしまった。
目を醒ますと、電車は止まっていて
車内は真っ暗だった。
周りには誰もいない。


スマホのライトで周囲を照らし、
先頭車両へと向かった。
運転手がまだいるかもしれない。
しばらく歩くと、
その先に明かりが見えた。
誰かがいる。
私は歩いた。

重い扉を開けると、
異様な光景が目に入ってきた。
暗がりに男が二人、
女子高生を囲んでいた。

咄嗟に目を逸らしたが
遅かった。
ムッチャこっち見てる。
完全に気づかれている。

男が睨みながら、
こちらに歩いてくる。
おい

お前ここで何してんだ
見たよな？
いや……あの……
いや……何も見てません……

おい、
こっち来い
胸ぐらを掴まれ、
無理矢理、
引き摺られる。
ぐいっ

そして、その子の前に
無理矢理、
連れてこられた。
男たちが私の処遇について
話を始める。
嫌な雲行きだ。
ヤツに
聞くか？
おい、どうする？
誰かいるなんて、
思わないよなぁ
そうだな

男はスマホを取り出し、
話をし始めた。
通話を終え、男は言った。
ソイツにも
やらせろ
ってさ

男が私の胸ぐらを掴む。
私は、すごい力で
羽交い締めにされ
自由を奪われた。
ドっ

これ、預かるから
逃げるなよ
動けないところを
スマホを奪われた。
まずい。
逃げられない。
男に頭を小突かれ、
女の子がひざまずく。

女の子は
私のズボンに
手をかけた
カチャ カチャ

私のものを取り出すと、
手で刺激を与えはじめた。

柔らかく、暖かい手の感触。
萎えていた私のものも
徐々に大きくなってくる。
ふ…
くちゅ

大きくなったのを確かめると、
手を止め、ゆっくり舐め始めた。
いやらしい音が車内に響く。

丁寧に、舌を這わせ、
焦らすように、ゆっくり
舐めていく。
ハァ
ハァ
ぴちゃ
ぐちゃ
しちゅ
ぐちゅ

舌で丹念に
敏感なところを舐めると、
ゆっくり口にふくんだ。
口内に貯まった唾液が暖かい。
しゃっ
くちゅ…
ぴちゃ…

先っぽが、
暖かく湿った口内に
包み込まれる。
いやらしい音が
車内に響き渡る。
ちゅぷ
ちゅぷ
じゅっ
じゅっ

電子シャッター音が
車内に響く。
男が、スマホで写真を
撮っているのだ。
カシャッ
カシャッ
ぐっちゅ
ぐっちゅ
くちゃ。

動画も撮られている。
これで逃げることは
できないだろう。
00:01:09

いやらしい音が響く。
唾液が口のはしから
溢れ出す。
ちゃっぽ
ちゃっぽ。
じゅっ
じゅっ

深く、深く
くわえこむ。
喉の奥に
当たるような感触。
どぐぐぐぐ
ぐプッ
グエ…
くちゃ
オエッ
ぐぷぷ

じっぽぐっぽ
目の端に涙をためながらも、
深く浅くを、気持ちが良い速さで繰り返す。
じゃるるるるるる
オエッ
ぐちゃぐちゃ

ビュルルルドピュッ!!
どろっ
ぐちゅっ
ごぽっ
ごぽ

ゴクン

口の端から
溢れた精液を
丁寧に集め
指でぬぐいとると
全て、コクリと
飲み込んだ。
ハァハァ
ハァハァ
ビクビク
ビクビク
んっ
くちゃ
トロ…

終わったか？
じゃあ、
そこで見てろ
ハァハァ
男は、そう言うと、
スマホをしまった。
奴は、ずっと動画を撮っていた。
私は拘束を解かれ、
脇へどかされた。

スマホを奪われ、
写真を撮られた私は、
逃げるわけにもいかず、
彼女が
男たちに犯される様を
見続けた。
ぴちゃ
くちゅ

バン
バン
バン
バン

後ろから蹂躙され
パン
パン
パン
パン
ドピュッ
ビュルルルル…
ぐは
くち

欲望を吐き出し、
中出しし、
ゲポッ
ゲポ
カチャッ
カチャ
ドプッ…
ゲプ…

それが終わると、
次の男が、それに続いた。
ばん!!
ばん…ばん!!
ばし!!

より乱暴に
腰を叩きつけ
精液を体内に
吐き出した。
ぱん
ぱんぱん
どぴゅっ!!
べゃる?

男たちは、
言葉もなく、
黙々と行為し、
それを終えた。

私はその様子をじっと見ていた。
行為を終えた男が
近づいてくる。
ハァハァ

男は、
私に向かって、
強い口調で言った。
お前もやれ
いや……
でも……

まぁ、
勃つんなら
……だがな
気づいてないのか？
あいつ、男なんだ
えっ……
男？

あいつの男に
頼まれて、
こうやって
犯してるんだ。
あいつら
変態なんだよ
ヤツは、
隣の車両にいて
犯されてるのを見て
喜んでやがるんだ。
えっ……
あの子が男ってのも
信じられないのに
なにそれ……

信じられなかった。
やはり、どう見ても、
男には見えない。

その子は、
上目遣いで私を見ていた。
青臭い匂いが、
辺りに充満している。
先ほどの男達との
痴態が脳裏に蘇る。

聞きました？
僕と『彼』のこと
すいません。なんか
巻き込んじゃって
本当だよ。
犯罪に巻き込まれた
と思ったら、
ただの変態プレイかよ。

そう思うと、
なんだか腹が立ってきた。
チラ
僕じゃあ……
やっぱり魅力
ないですよね
どう見ても、男には見えない。
そして、今、
私は誘惑されていた。

頭の中で、何かが
切れる音がした。
相手の体に覆いかぶさり
口をふさぎ、手を押さえた。
ぐぐ…
ぎゅー
ガタッ
ゲ…

手を押さえたまま、
強引にキスをし、
首筋を舐める。
グググ
チュッ♡
あ♡

甘い吐息が漏れる
目を閉じる。
形ばかりの抵抗が
弱まっていく。
いや♡
チュッ♡
チュプッ♡
あ♡
はぁはぁ

ねぇ……
あ♡
甘い体臭と
青臭い饐えた匂い。
熱い吐息が頬を撫でる。

いれて……
ハァハァ
写真を撮られたことや
男たちに監視されていることが
頭をよぎった。
でも、もう自分の頭では
考えられなくなっていた。

私は、すでにいきり立っていた
肉棒を、その、卑猥に口を開けた
穴にねじり込んでいった。
それは、すんなりと、
受け入れられていった。
ん♡
うぷ
ハッハッ
ん♡
ビクッ
ピクッ
ん♡
ぬぷっ
ぐぢゃ
4ppp…

すでに乱暴にほぐされた穴は
私を、すぐ迎え入れ、馴染んだ。
私は、欲望のままに、
腰を動かした。
あっ
あん
いいっ
ビクッ
ビクッ
ずぷっ
ずぷっ
ずぷっ
ずぷっ
きゅん
きゅん
きゅん

私は、欲望を叩きつけた。
喘ぎ声が次第に大きくなり、
壁に頭を派手にぶつけた。
ゴンゴンゴン
あっ
あっ
あん
ビクッ
ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱん
ビクッ
きゅん
きゅん
きゅん
ぐちゅ
くちゅ

あっ♡
あん♡
あ♡
ハッ
ビク?
ビクン
ぱん♡
ぱんぱん♡
ぱん♡
ぱん♡

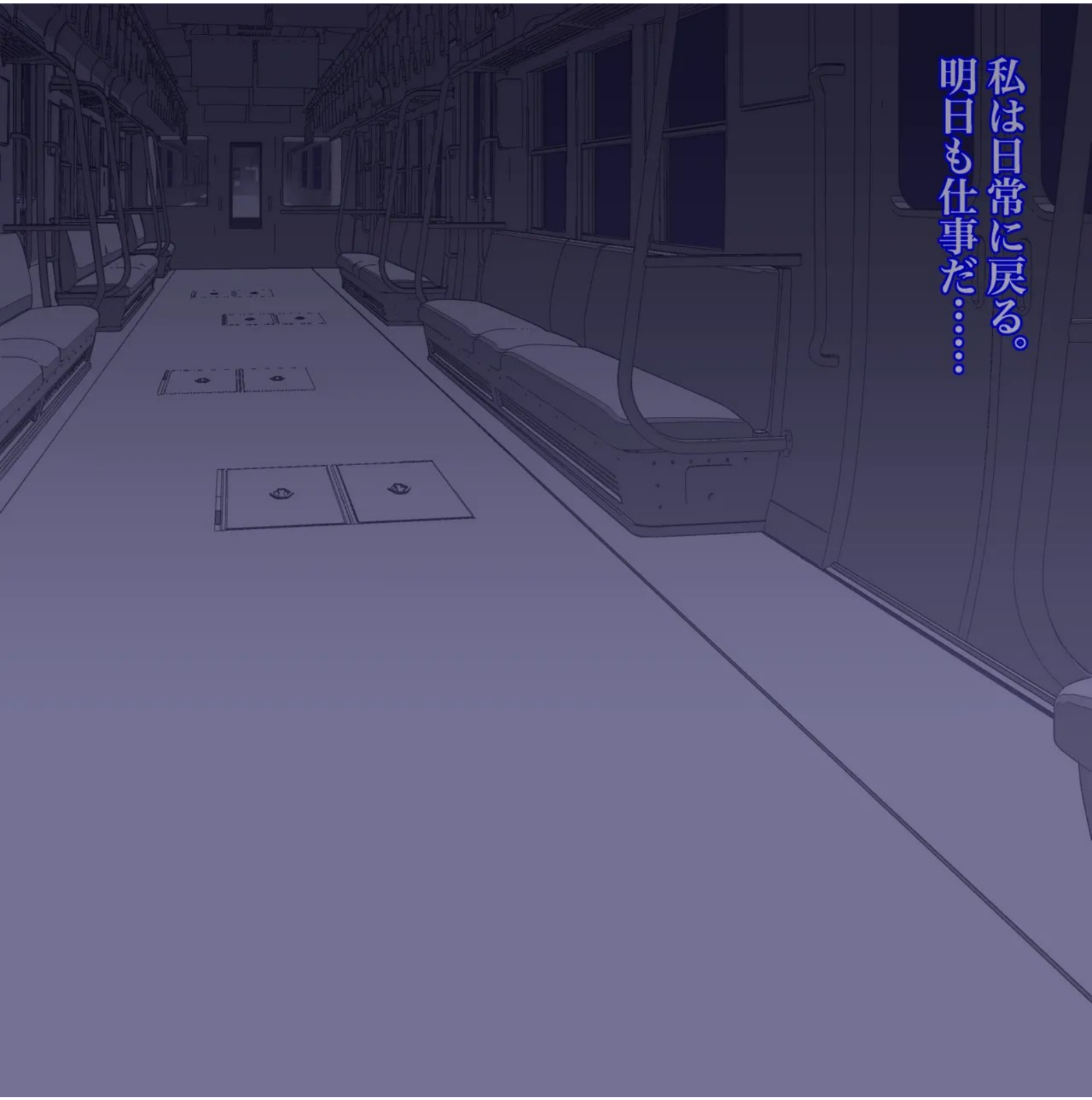
ビクビクビクビクッ
ビクビクッ
ビクッ
ぎゅ
ビクッ

あ～♡
ハァ
ハァ
ハァ
びくっ
びくっ
ぎゅっ

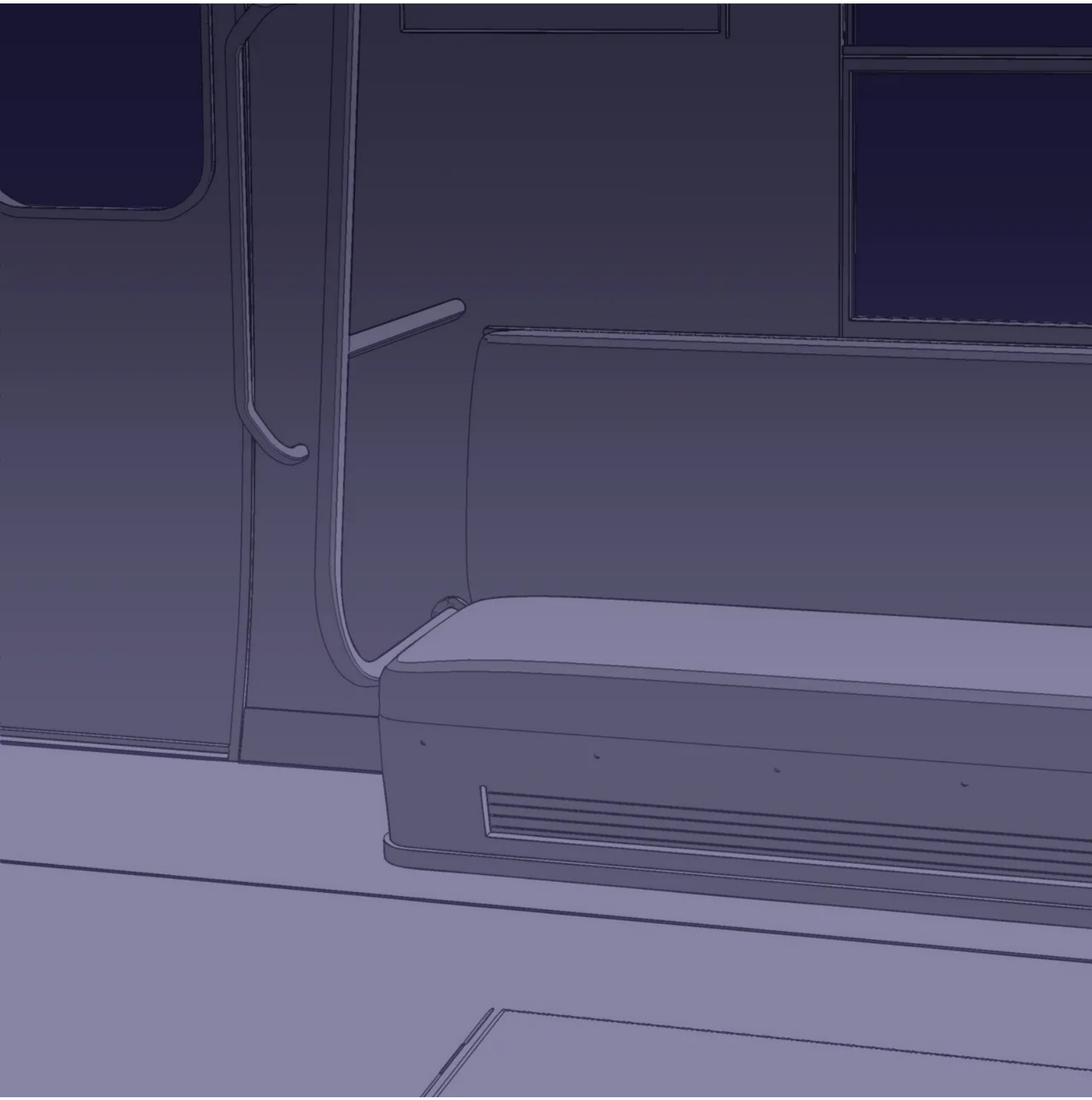
行為が終わった後、
飛び散った精液を
拭き取りながら、
荒い息と共に、
ここから出ていく方法を
教えてくれた。
後ろの車両から、
外に出れるから
ハァ
ハァハァ

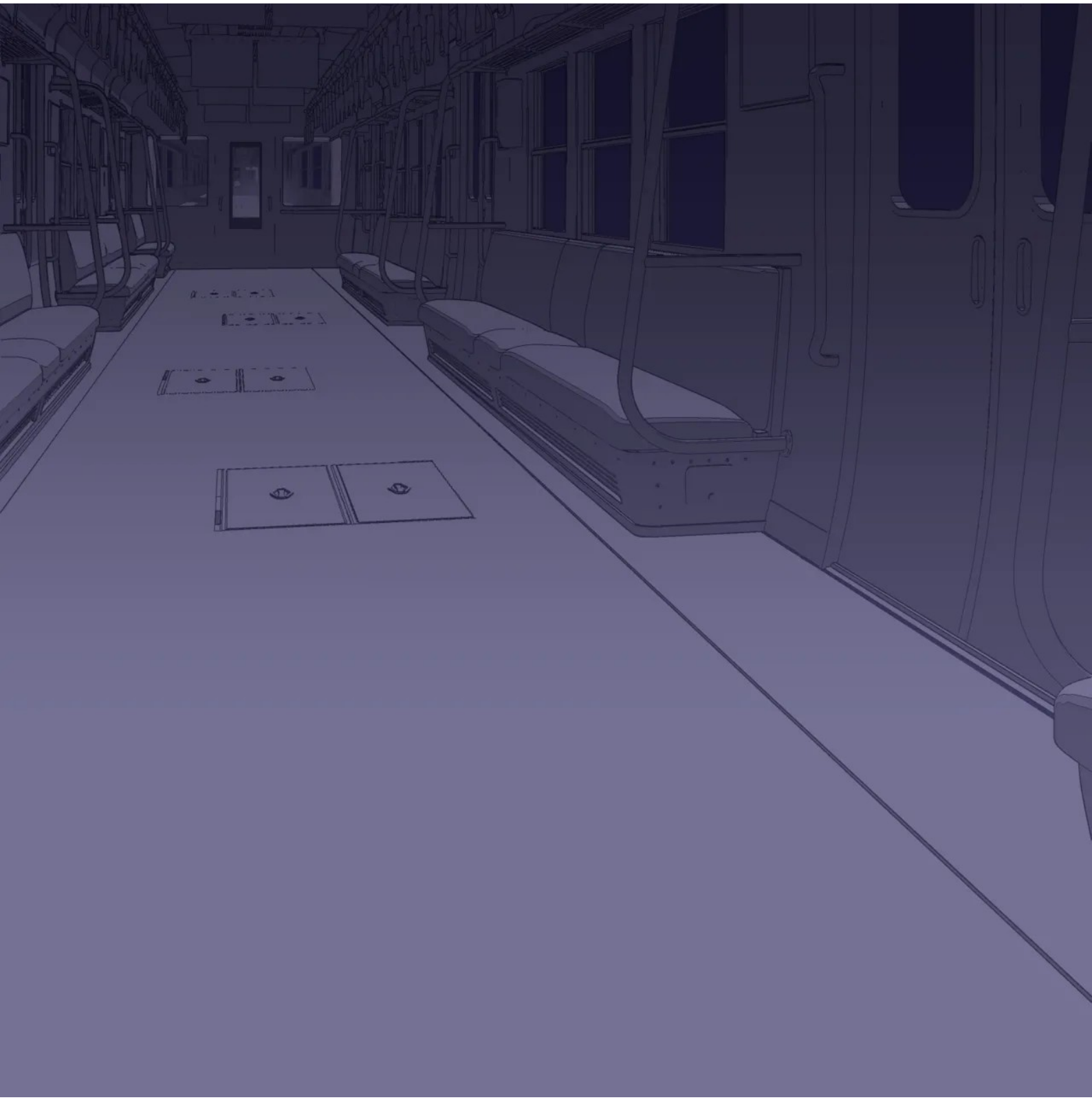
男から、自分のスマホを返してもらった。
写真のデータは渡してくれなかった。
私が、この秘密を守らなければ、
ばら撒かれることになるのだろう。

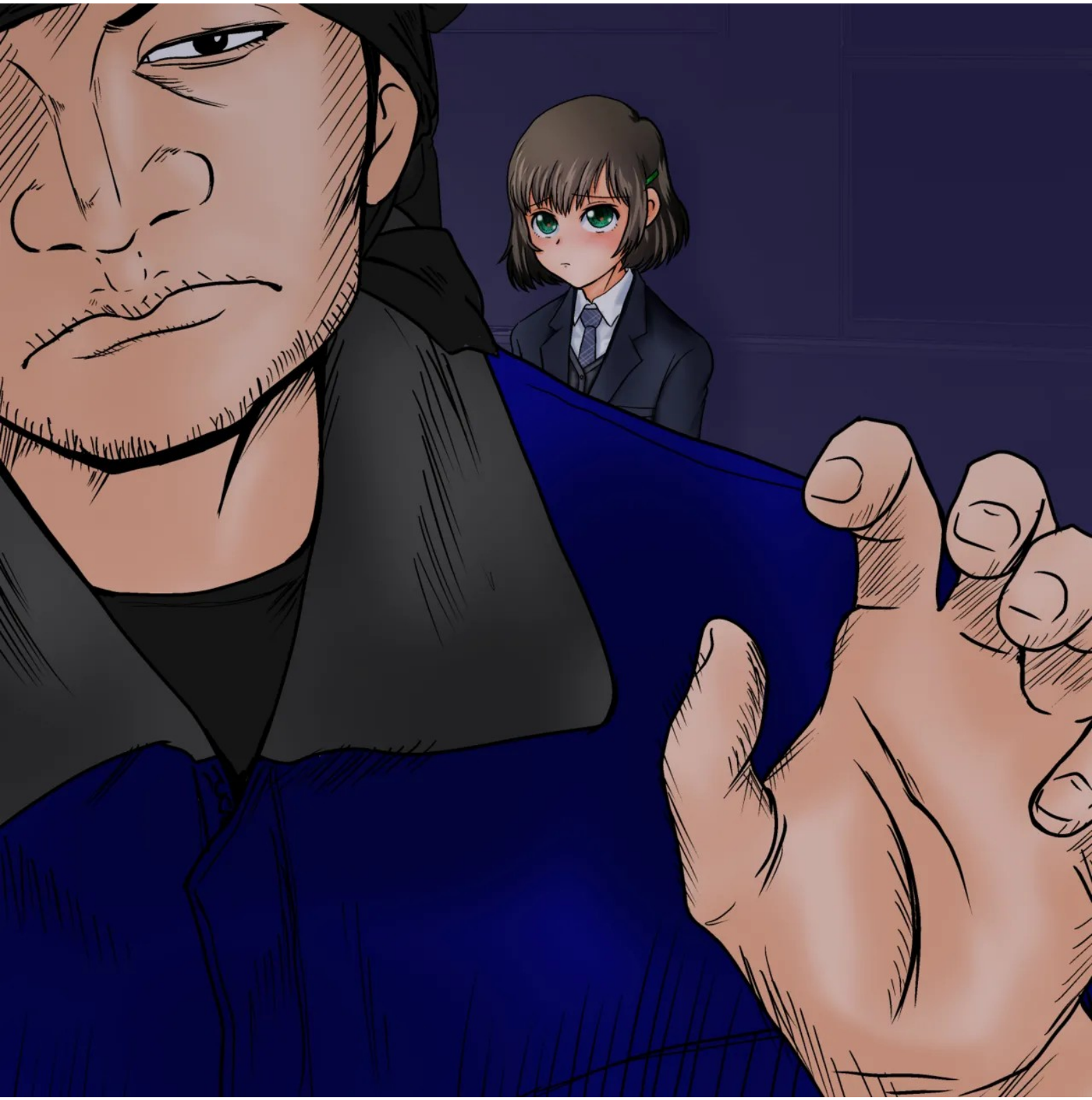
彼らは
秘密を守るだろう。
今日のことは、
誰にも言えない。
そして、
一夜の夢のように、
思い出すだろう。


私は日常に戻る。
明日も仕事だ……

男の娘最終輪姦電車
STUDIO
BASS LINE
EXPLICIT CONTENT







00:01:09